

## 審査の結果の要旨

氏名 黄士娟

黄君の論文テーマは「台湾近現代の建築保存に関する研究」である。台湾は過去百年間に、日本による統治と現政権の二つの体制を経験したが、その各々において建築保存は当局の抱える国家意識と密接に関わっていた。本論文は、1895年の日本による台湾領有開始から著者が実地調査を行った2000年までの約百年間における、歴史的な建築に関する価値観の変化を調査し、それが建築保存にどのような影響を与えたのかを考察したものである。

本文は、時代区分により二部構成となっている。第一部は1895年より1945年までの日本統治時期を取り扱っている。初期の日本人研究者の台湾の建築史に関する考え方は、中国南方建築の垂流とみなすものであったが、やがて台湾に世界的な文化交流の一拠点としての価値を見出す方向に転換し、政府も台湾の史蹟保存を重視するようになった。史蹟を指定する上では総督府の示した歴史観が基準とされたが、実際の修復作業は、各地方官庁による積極的な取り組みにより達成されたものであった。

第二部は第2次大戦以降を対象とした。大陸から来た国民党政府ならびに研究者は当初、日本統治初期と同様に、台湾の建築を中国南方の一分派にすぎないものとして軽視した。しかし、いくつかの保存運動を経て、その独自性を見出そうとする意識が醸成され、台湾の持つ歴史・文化が重視されるようになった。このような社会的態度の変化が背景となり、建築修復の考え方も変化をみせていった。ここでは、具体的事例を交えてその過程を述べている。

以上の時代別の記述を通じて、本論文では歴史的建築に関する認識が保存及び修復に影響を与えているのではないかという視点から、その両者の関係に着目して分析を行っている。戦前・戦後の体制の変化や社会的通念の変化を考慮し、歴史的建築を保存する概念の生成とそれが実際の保存修復に与えた影響を明らかにしている。

既往研究では、台湾における建築保存の概念について取り扱ったものはあるが、それがどのように修復に影響を与えたかという点については未だ解明されていなかった。一方、日本統治期と国民党政権初期の建築の修理に関する研究は、空白のまま残されていた。本論文では、多くの修復報告書を収集しその中から各時期の代表事例を挙げて分析をおこなっている。特に第2次大戦前と終戦直後の貴重な修理図面・史料を発見し、当時の修理方法を明らかにした点は、台湾での建築史研究においてたいへん意義深い作業であった。

現在台湾では建築保存の意識は高まっているものの、実証的研究に基づく修復方法は未だ定着していない。本論文は、台湾における過去の修復事例を研究対象として客観的な分析を加えたものであり、今後の建築修復にとって大きな意義を持つものと考えられる。以上の事由により、本論文は博士（工学）の学位論文として合格するものと認められる。